道行き見えないトリッパー

ガビアル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
道行き見えないトリッパー

【Ｎコード】
Ｎ７８３４Ｘ

【作者名】
ガビアル

【あらすじ】
大層な必要性も、必然性もなく、リリカル世界に厨二容姿で混入してしまった主人公の一人称練習作品です。ＴＳ要素有りなので苦手な方はご注意下さい。

飛んでも平気なプロローグ（前書き）

初めまして。つたない拙作をご覧頂きましてありがとうございます。

皆様の小説を読んでいるうちに妄想止みがたく、書きつづっております。

誤字脱字など注意いただければ幸いです。

飛んでも平気なプロローグ

声が聞こえる。

「起き――ください、誰もが垂涎のトリップイベ――がやって――――たよ！」

眠い。

買い換えたばかりの羽毛布団の暖かさに包まれながら俺はみじろぎをした。

そういえば昨日は徹夜の仕込みだった。眠いのも当……然……

「……ああもう！　起――てーっ！」

……騒がしい。

布団を頭に被る。……静かになった。今日は祭りでもあったっけ……さわが……

「……これは――――てしまいましょうか……あー、ええと、駄目で――。職分ですし全う――とですね」

ゆさゆさと揺れる。揺れる。揺れる。ゆれゆらゆら。じしん？

「……うほ？」

「新感覚な寝ぼけ言葉なのです……いいですか？　まずあなたはトリップすること――りました。何か――があれば聞き入れ――とも――ます」

「……少女のこえが……とりっぷ？」

……とりっぷ……どりっぷ？　とら……ぷ？　とりっくおあとりーと……

「少女――ね？　ああ！？　話し――る間にま――が！　も、もう――ったら仕――りません。望――言ってください！」

「んー……羽毛最高、このままねかせ……」

「羽毛……羽――ね。　容姿は適――トリッ――の皆様が望むよ――ものにしておき――」

何か聞こえる。なんかまあ。

「……すきに……して。ね……む」

「――良い――を！」

ぼーっと布団の温もりの中で、夢見てるなーなんて夢の中で思いながら、俺はまた眠りについた。

◇

目覚めは首筋をなでる冷たい感覚だった。

「……んあ？」

妙に細い声が聞こえる。それよりこの冷たいのは？

起きてみ……ようとして体が固まった。

冷たいものはどうも生き物だったらしく動いている。首筋を這いずりまわっている。

気持ち悪いのだが、どうも寝起きにこんなドッキリやられると驚きで固まってしまうようで、いや思考はどうもさっきから回るのだけど、なんなんだこれ。なんなんだこれ。カメラはどこだ、氷で撫

で回してくれてる奴はどこだ？　うわ動いてる動いてる、蛇か蛇なのか？　蛇っぽいって！

「っヴぉうぁっ！」

我ながらどうかと思う奇声をあげながら、慌てて布団から飛び出し、首に巻きついてるものを引き剥がして投げつける。
木にべちっと当たってその３０センチほどの蛇はカサカサと慌てて茂みに逃げ込んだ。

「……お、お、驚ぇたー……て……あ？」

ぜーはー荒げた息を落ち着ける暇もない。
何せ見ている目の前の光景が光景だ。

「……森？」

そりゃもう立派な森だった。
樫、ブナ、楢。人の手があまり入っていないのだろう雑木がひしめき、ツタが絡まりあっている。
振り返って後ろを見てみる。

「布団だな」

さっき慌てて飛び出したせいかぐしゃぐしゃになった布団がある。
それは別段おかしくない。
地面の上に直敷きしてあるのを除けば。
その向こうに１０ｍほどの澄んだ池があって、そこから手前は花が咲き乱れ、ザ・草原と言った感じののどかな風景になっているのを除けば。

先ほどまで変な夢を見ていたことを思い出す。

「また夢か？」

夢を夢と認識できるのって明晰夢というのだったか。

初めて見たかもしれない。しかし、蛇で目覚める明晰夢って、夢占いにかけたらエラい酷い結果が出そうだ。

なんとなく、池の方に歩いてみる。

物語だと池の中から美人が出てきたりとか、未来の知識を映したりとかかな？

だが、覗き込んでみると、映し出されたのは。

「なんだこの子供……」

見たことない子供だった。

俺が右手を上げるとその子供は左手を上げる。

俺が左手であいーんのポーズをとれば、その子供は右手であいーんをした。

……いや夢なんだから百歩譲って子供になるのはいい。回帰の欲求なんて誰にでもあるし。

でもこの姿はねぇよ。

「アルビノ銀髪オッドアイとか……」

こんな欲求が俺にあったのかー。厨二なのかー。中学の時に発症しなかったのが悪かったのかー。

少し逃避気味な思考が揺れる。

この調子だと邪気眼とか隠された人格とか黒翼の堕天使とかそういうのまで搭載されて……と、翼とか思い浮かべた時だった。

「ぶぷっ……おぅふ……息ぐる……し……ぐぁぁ」

寝巻きに着てたジャージの背中がなんだかもこもこって動いて盛り上がって、てか狭い。狭い！　必然首が絞まって、締まる締まる締まる。ぐぉぉぉ……

限界点に突破しようという時、びりべりばりばりと、ジャージの背中が破けはじめ。なんと翼が……

「生えた……」

なにそれ怖い。

色は真っ白でもふもふ具合はなかなか良さそうだが、いや漆黒の堕天使とかにならずに済んで良かった……のか？　え？　えー？

いやなんだろうこれは。

うん。明日聞いてみよう夢占い。

こんなカオスな夢は何というかすごすぎる。

いい年した男がとか、ふっと思ったが、いやコレだけの夢だと十分話しのネタになる。

ひとまずこれからすべきことは。

「寝るべ……」

いそいそと布団を直し、もぐりこむ。

固く眼をつむり布団を頭から被る。

翼が邪魔になるようなので横向きに体を丸めて。

なんだか……いろいろなんだか……夢でも脳は疲れてたのかもしれない。

きっとそうだ、新作メニューの仕込みで徹夜なんかするからこんな夢を見るんだな。

何も考えたくなかっただけかもしれないが。今度こそちゃんと真

っ当に現実に目を覚ましますようにと祈る。
急速にぼんやりしてきて……意識を手放した。

一話　夢から醒めても五里霧中

今日は本当に酷い夢を見た。
寝ぼけて誰かに応対しちゃったなーと思ったら、草原で目覚めて、自分がどこかの厨二小説などでよく見かけるような特徴を兼ね備えたりしていて。
あまつさえ翼とかもこもこと元気に生えて、なにこのキメラ。いや天使ってよく考えたら人と鳥のキメラだよねとか思ったり思わなかったりした。
――そんな夢を見たのさ。

「で、終わりになればよかったのに」

そんな夢、いや悪夢は際限なく、容赦なく、否応もなく続行中だった。
流石にあれだけ寝たらもう寝ることも出来ない。
恐らく今は昼。
なんたって太陽がいい具合に有頂天。俺の心も温かく照らしてくれればいいのに。
ため息が先ほどから連続して出ています。
なぜため息がでるかというと先ほどから嫌な予感がするわけで。
それは股間でむずむずしてるわけで。
いやただの尿意なんですけどね。
とてつもなく嫌な予感しかしない。

「そうだ、小便行こう」

京都行こうみたいなノリであえて軽く逝ってみる。誤字ではない。
これは逝くが正しいのだ。

ちょっくら木陰に立って、まあ、寝巻きのジャージのままなので下ろさせてもらいます。
トランクスもちょっと下ろしてみまして、また戻して。

「見なかったことにしてぇ……」

涙が溢れた。
なんたって、長年付き添ってくれた我が相棒が。マイ・サンが。愛すべきエッフェル塔が。ビッグダディが。ごめん嘘ついたビッグって程じゃない。

「……無ぁい……」

へそまで届くようなご立派なもんじゃなかったけど。
毎朝自己主張してくれて、時にはちょっと困ったちゃんだった愛息。その姿が影も形も。
小さくなってたとか、しぼんでるとか腹の中に納まるという空手の奥義とかでなく。見事に玉も無い。
明日のジョーが灰になるような心境。
俺は灰になるという感覚を生まれて初めてその身に刻んだ。

◇

思考停止とは便利な言葉だと思う。
応用範囲も広く、例えば誰もが考えてなかった事なのに、いざ政治家がそれで間違えればだれそれは思考停止に陥っていたことを反省しなければ云々なんぞと叩かれたりもする。
ただ時には、精神的に追い詰まっている時などにはこの思考停止というものは切実に必要となるものらしい。
性転換とかなんかクレバスがあったとかそんなんは思考のダムに

止めて考えないことにした。考えないったら考えない。
なんで、とか、どうして、とかは時間のある時にゆっくりゲームでもしながら考えればいいことだ。

『まず、もしもという時は状況に適した優先順位を付けて判断することだ』

そんな台詞を迷彩服を着ながら俺に語った親父を思い出す。
別にアフガン帰りの軍人とかベトナム帰りのグリーンベレーとかではなく、至って普通のサバゲーマニアである。
だが、マニアというものはこだわりも大きいのか、思い出すと、どこの軍事教練だよという知識もある。

「ひとまず目先のことを考えよう。それがいい、それに決めた」

本当に思考停止とはありがたい。
何しろぽんと投げ出された五里霧中。何がどうしてどうなったという脈絡もなく、順序もなく、訳が判らない状態だ。……この場合の優先順位はというと、自己診断、状況把握だろうか。
気を取り直して、後方の静穏という名前が付きそうな池に向かう。
上流から流れ込んでいる小さな川がせき止められて直径１０ｍほどの池のようなものになっているようだ。岩がごろごろあるわけでもないので、それほど渓流というわけでもないようだが。
水に触ってみるとかなりの冷水であることが判る。近いところに湧き水の源流があるせいなのだろう。
水面に映るアレな姿を見てため息を落とすも、いつまでもじっとしているわけにも行かないので、勢いよく水面に顔をつける。

「……ぷぁー冷てぇ」

いい感じにすっきりしてきた。
拭くものもないので、破れたジャージの上着で拭う。化繊は水の吸いが悪いがこの際仕方ない。

「さぁて、まずは……」

自己診断。これはあまり考えたくないが、否定しても仕方ない。この、明らかに日本人らしからぬスラブ系というか、ロシア人と言われて思い描く典型のような顔立ちで、銀髪オッドアイの痛い容姿の人物は俺ということらしい。
髪の長さはあまり変わってない。耳が隠れるか隠れない程度のショートで、割とざんばらりんと切ってある。
色はもう笑うしかないようなプラチナブロンド。さらさらの直毛である。アーモンド型の大きな目に高くて通った鼻梁。色白というか色素ねえだろというくらいの白い肌。血の色が透けて見えるので冷水で刺激受けた頬は今ピンク色だが。うわぁ。
くじけるな俺。イタくてもくじけるな。がんばれ、やればできる。俺はできる子だ。自己暗示をかけて再起動する。
目は左目が琥珀、右目が青。金目銀目という奴のようだ。瞬きを二回。水面に映る姿も瞬きを二回。睫長い。爪楊枝8本乗せがいけそうな感じである。
いやまぁ、そこまでは人間の範疇だ。それはいい。よくはないけどいい。
背中の感触が問題だ。この至って普通に生えてる翼。なんだろうか、背中に腕でもついているかのような。天津飯の四妖拳、背中に腕が生えて手数が増える技だったか。そんなのを思い出す。
腕とは大分関節の付き方が違うが、何というか、当たり前に普通に動かすことができる。手の平をパーにするような感覚で翼がばさーと開いたり。ぐっとすると折り畳めるとでも言えばいいのか。……いかん、ぐっとしすぎたら攣った……うぉお、痛ぇ……ぴくぴく

する羽根が微妙な気持ちを増幅する。
……どうしようか、大分人間辞めてしまっている気がする。この上さらに額に目でも出来たら、目も当てられない。というか人目に当たりたくない。幻想郷とでも立て札に書いて山に引き篭もるしかない。
落ち着こう、落ち着こう。深呼吸を数回して強引に落ち着く。
ともあれ、この羽根の長さは目一杯広げると片羽根で２メートルくらいか、そのくらいまでは広がる。両方広げれば、俺は体長４メートルの霊長類ということになる。いや、羽根生えてるから鳥類なのか？　混ざって霊鳥類？　やめよう。なんだかＣＯＭＰとか持ってる人に使役されそうだ。コンゴトモヨロシクとか言う気はない。
そして、体を動かすのにまるきり違和感がなかったので気付かなかったのだが。……縮んでいる。洗濯機にかけられたニットのセーターのように縮んでいる。具体的には三分の二くらいに小さく。今の身長は１２０センチと言ったところだろうか。手足の長さも短く、手の平に至っては何というプニ具合。マシュマロと勝負が張れそうだった。……何というか子供にしか見えない。いや認めよう、今の俺は子供の体であると。認めざるを得ない。よし、自己診断はひとまずこれで……。
と、そこまでが俺の限界だった。

「ありえん……ありえん……」

頭をかかえてうずくまる。
夢だろ醒めろ醒めろ醒めろ。

「うぁー……」

そんな自己診断にも思考停止という名の蓋をして、のろのろと立ち上がる。

今の俺を誰かが見れば、レイプ目というものを拝めたかもしれなかった。

「まあ、なんだ……状況、把握せんと……」

既にグロッキーです。

ギブアップボタンかナースコールがあれば連打していると思う。リングにタオル投げていいならセコンドに百本はタオル投げさせてる。と言っても、いつまでこの状態でも仕方ないので。

大きく息を吸って吐く。頬に両手でビンタで気合を入れ。

「……痛ぅぁ！」

思ったより力があった。というか歯で口の中を切ってしまった。ひりひりするが、これはこれで気が紛れたので良しとする。

まずやる事は……

あたりを一通り探索した、あまり詳しいわけでないが、植生、また、木に付いている獣毛をチェック、危険な動物がいないかを確認する。一応熊避けに一定感覚で音を鳴らしている。

円を書くように池の周囲を軽く探索した後は、歩きやすそうな、木々の隙間の多い場所を縫って、放射状に探索をする。

迷わないように石でサインを残しながら木々の間を歩いていく。

『森歩きは急いではならない。落ち葉に隠れて穴があるなどはよくある事だ、大雑把な■の事だ。注意しろよ』ふとまた、変人親父殿の台詞を思い出す。大雑把は自分だろうに、よく俺の事をそうけなしていたものだ。

……確かに、連絡手段もない今、怪我をしたら笑い話にもならない。ゆっくり着実に歩みを進める。――1時間も歩いた頃だろうか。唐突に森を抜けた。

「……おおぅ」

感嘆が出てきてしまった。

森を抜けたと思ったら切り立った小高い崖になっていた。

クライマーでもないので降りられる自信はないのだが、そこから見渡せる風景こそが有りがたいものだった。

街である。

距離は１０キロメートル程だろうか。昼間というのに車も行き交い、それなりに活気のありそうな雰囲気である。中心部と言えそうな所にはビルが立ち並び、俺から見て左側は緩やかな湾となって、海に面した公園や、倉庫街が広がっているようだった。

港湾都市と言えばいいのだろうか、ひとまず、おおまかな方角だけ確かめ、別ルートで近づいてみる事にする。

太陽が出てるうちなら、おおまかな方角だけは判る。

日が暮れる前には街に着きたいな、と疲れる足を持ち上げてまたゆっくり歩きはじめた。

◇

「ついた……」

やっと森の切れ目というか、人里につながる道路が見えた。人家も見える。

どうやら山間の住宅街のような所に出たらしい。

途中で拾った手頃な木の枝を杖にして、ぐてーっとへたりこむ。

空を見ると既に夕方。

木苺とか見かける度にちょこちょこ食っていたものの、流石に腹も減る。カロリーが足りない。

とはいえ、疲れているのは精神的な部分らしく、体は妙なことにあまり疲労を感じていなかったりする。３時間以上も道無き道を山

歩きすれば成人男性でも鍛えてない限り疲れは感じると思うのだが。
そのあたりの感覚の違いというのがまた少々気持ち悪い。脳が体の動かし方を理解していないような気さえする。……考えるどつぼにはまりそうなので、これも考えないことにするのだが。

「さて、とりあえず交番にで……も……？」

俺は自分の今の容姿を思い出して頭を抱えた。

「どこの世界に羽根生やした子供がいるんだよ……身分証明だって出来ねぇし、前とは見た目も全く違うし……」

住所不明、戸籍不明、世界に類を見ない類の奇形を持った、保護者もいない子供である。
最悪の場合、闇社会で流通ルートとか、どこのバッドエンドですか。
悪い方向に考えるとキリがない。
ただ、この見た目で目立ちたくもないし、人目を忍んで家族に連絡、かね？
何しろ格好も普通に恥ずかしいのである。
羽根出す時に、上着は破れて、背中で結んでいる状態。
泥で汚れたジャージに、靴など当然ないので泥だらけの靴下。
背中から生えてる白い羽根。
どこの違法研究所から逃げ出してきたの？　とか言われそうだ。
ライトノベルなら。
そんな事をつらつらと考えながら、意識して人家から距離をとって歩く。
時間としてはもう夕方を過ぎて、暗くなりかけている。
先ほどまでちらほらと帰宅する小学生が見えたのだが、そろそろ夕食と団欒の時間ということなのだろう。

実のところ。

「飯の臭いが漂ってきて腹が……」

今の俺の姿を見る人が見れば、ザ・ションボリというタイトルで写真撮ってくれるんじゃないだろうか。せつない。空腹時に美味そうな臭いせつない。マッチ売りの少女も確か、空腹なのに七面鳥を食べる家庭を夢見ているなんて描写があったっけ……判る、判るぞ少女よ。食いたいなぁロースト七面鳥。中はジューシー、外はカリカリ。バジルとオリーブの香りがぷーん。

「うぐぁ、とんでもないものを想像してしまった……腹減った……もう、性犯罪者のロリペド野郎でもいいから見た目に釣られて飯くれんだろうか……」

実際に襲ってきたらねじり潰すが。何をとは言わない。

自己主張を繰り返す胃袋を抑えて、人気のない公園があったので、とりあえず水で腹を満たす。日本はすばらしい、水道水が飲み放題だ。涙が出そうになっているのはきっと気のせいだ。

とりあえず水分補給したせいか、多少は余裕がでてきた。

一つ思った事があり、公園に設置されている自動販売機の下をよーく見る。普通なら懐中電灯で照らさないと見えないところだが、目をこらす。発見。そこらへんの枝で手繰り寄せる。

１０円硬貨をゲットした。１００円硬貨を２枚ゲットした。本当は届けないと遺失物横領になるのだが、非常時なので堪忍してもらう。

自分自身でよく判ってない部分も多いのだが、どうもこの子供ボディ、やたらスペックが高い。

夜目が利くわ、力強いわ、スタミナはあるわ、人の気配だの臭いにも敏感だったりする。

野生動物にでもなってしまった気分だが、羽根生えた妖怪とでも思えばおかしくないのかもしれない。妖怪……そんな事思いつく時点で段々俺の常識も壊れているようではあるが。

ともあれ、使えるものは使う。

何より、これで電話が使えるのが大きい。

というわけで早速公園の公衆電話で、硬貨投入。自宅の電話番号をプッシュプッシュ。

しかし、いまだにこの昔ながらの緑色公衆電話が残っているというのは懐かしさをそそる。

「携帯が出回ってからはめっきり見なくなったからなー」

今となればこの電話ボックスのべたべた貼られている、教育に非常に悪いピンクチラシも懐かしい。

プッシュし終えると、数秒の時間の後こう言われた。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

心臓が早鐘を打つ。

「間違えた？」

再度硬貨を入れてゆっくり口で確認しながらプッシュ。

「あなたがお掛けになった電話番号は、現在使われておりません。電話番号をお確かめになって、もう一度お掛け直し下さい」

動悸が止まらない。なのに血の気が顔から引くのが判った。

三度、四度掛け直す。頭で番号が間違ってないか、思い出しなが

ら。
しかし、つながらない。
隣近所の……小学生の時からの幼馴染、腐れ縁といってもいいかもしれない。奴のところに電話をかける。
今度もつながらなかったらどうしようか、と少し指が震えた。
数秒待つと、電話のトルルルというコール音。
大きく息を吐いた。やがて、ガチャと音が響き相手が出る。

「はい、溝呂木です」

若い女性の声ではっきりそう言われた。

「溝呂木さん……ですか？　――でなく……」
「はい、違いますよ？　お間違えでしたか？」

すいません間違えました、と言って切ったが、声はかすれて届かなかったかもしれない。
動悸が激しくなる。
冷や汗が止まらない。
ふと目が備え付けの電話帳に留まった。
探す。
覚えている限りの近所の新聞屋の名前、工務店の名前、工場の名前、魚屋の、小さい服屋の、行きつけの喫茶の、よく買いものに行くスポーツ洋品店の、腐れ縁の友人が大好きなゲームセンターの。
一致する店が存在しなかった。
それどころか、以前住んでいた、町の名前そのものが見当たらない。
判らない。何でどうしてこうなったのかが判らない。得体の知れない恐怖がこみ上げてくる。
唯一つ判るのは。

「……はは。やべぇ……本格的にやべぇ」

人との繋がりが何一つない、本当の意味で孤独という事だった。

◇

気が付いたら、最初目を覚ました時と同じ場所に戻って来ていた。
顔はぐちゃぐちゃで涙だか汗だか鼻水だか判らない感じにグロくなってしまっているようだった。

「……ああ……あー、はぁ……」

なんだか、頭がぐらつく。池の水で顔をばしゃばしゃゆすいでとりあえずグロさを直す。
後ろを見れば俺と唯一つだけ、つながりのある布団。探索する時に枝に干しておいたものが目に止まる。
その月明かりに照らされた青白い布団が、なんともシュールで皮肉で滑稽に思われて。

「……あー、本格的に駄目だ。精神的に病んでそうだな俺ー……。ぷっ……くくッかっ……ぎゃはははは！」

笑いがこみ上げてくるなんて。
腹が痛くなるほど地面を転げまわって笑って、笑って、笑って。
真っ白な羽根がドロドロになるまで転げまわって。
発作のように止まらない笑いの衝動が収まったのは、池にダイブして一通り泳ぎまわった後だった。
魚くんたち驚かせてごめん。おいちゃんも疲れてンのさ。
冷たい水の中でぷかぷか浮かびながら月を眺める。

眺めながら考える。
なんとなく、今まで気にしててもあえて考えなかった事を考える。
「俺の名前……なんだったけかなー……」
アルファベットで3文字、漢字で1文字だったと思った。
ただ、いくら思い返しても、墨汁をたらしてふきとったかのように曖昧になってしまう。
年齢も同様だった。
気付かないようにしていた。でもここまで考えるとどうしても気付いてしまう。
記憶の中のサバゲーマニアで破天荒で適当な親父も。
インドアでドラマに一喜一憂する妙にホットケーキが上手い母も。
子供の頃からエアガンで遊んでいたらいつの間にかガンオタからアニオタへ変異していた隣の悪友も。
記憶はあるのに、思い出がない。顔も思い出せない。言葉は思い出せるのに。
水彩絵の具で描いた絵に水をぶちまけたかのようにぼかされている。
「……あー、うつだしのう」
ごぽんと池に潜ってみる。沈む、沈む。あまり深いわけじゃないが、このまま沈めば底なし沼のように飲み込んでくれないだろうか。
このボディだと水の中でも隅々まで見渡せる。
水底でザリガニが威嚇していた。指を目の前に出すと挟もうとしてくる。かわしてつつく。挟もうとする。かわしてつつく。かわしてつつく。逃げようとするので背中をキャッチ。捕まえた。
卵を大事そうに抱えている。声が出せるならしゃぎーとでも言い出しそうな感じに怒っている。

なんだか力がいろいろ抜けた。
ザリガニは手放す。
水面に顔を出して息を吸い込む。
手のように自在に動かせるようになった羽根でぱちゃぱちゃと泳ぐ。バタ足の要領だ。バタ羽根？
水から上がって羽根の水を切る。絞った上着で体を拭う。
開き直った。
そもそもそんなに深く悩むのがとても苦手な方なのだ。多分。
落ち込むだけ落ち込んだら後は寝るだけ。
ひっかけておいた布団を草の上に敷き、虫除けの松葉を周囲に散らす。
明日は早くに起きてみよう。
そんな事を思いながら、すっかり馴れた翼にくるまって、上に布団を被る。
今は涼しいようだからいいけど、夏は暑苦しいかもしれない。そんな事を思いながら意識は薄れていった。

二話　生活基盤はゼロ地点

流石に三回も同じ風景を起き抜けに見てしまうと、夢オチという現実逃避も成功しない。

そんな事を思いながら目覚めた朝だった。

思い切り伸びをしてコリをほぐす。空はまだ薄暗く、朝もやがかかり、空気はひんやりとしていた。

気の早いキジがどこかでキェー、キェーと威勢のいい声をあげている。

昨日は混乱して騒いで泣いて寝て、何とか感情は落ち着いた。実は落ち着いてないけど、今は置いておき、今日やること、やるべきことを思い浮かべる。

「衣、食、住。それに情報か」

考えてみたら、昨日見た、港湾都市っぽい街の名前も確認していなかった。本当にせっぱつまってたようだ。

今自分がどの場所に居るかぐらいは確認しないと。いや、ここは本当に日本なのか。日本に良く似たパラレルワールドとかの方が余程安心する。

ただ、とりあえずの方針は決まった。まずは――

◇

前方のブロックの壁に隠れて息を殺す。

周囲からは生い茂るツツジに隠れて、この小さい身は周囲からは完全に見えなくなっているはずだ。

出勤する父親と思わしき人達に、母親と思わしき人達。それに全体的に見かける子供は幼稚園か保育園、あるいは小学生が多い。年

齢が高くても中学生といったところか。
昨日確認した住宅街は、やはり思っていた通りの家が多かったようだ。
山に近く、新築が多く、道に沿って一戸一戸の土地が整備されていた。
一つ一つの土地そのものはやたら広いというわけでもなく、恐らく都市計画で整備された分譲地なのだろう。
こういう場所は若い夫婦が集まりやすく、当然子供も多くなる。さらに小さい子供は成長が早く、衣服などはほぼ使い捨てに近い状態になってしまうことも多い。
やがて、人通りが少なくなり、全く人が居なくなったのを見計らい。俺は目当てのものをかっさらって、そのまま走り去る。
５０メートル先の森に向かい獲物を抱え、風になる。
森に飛び込み、先にマークしておいた安全地帯、――大きな木のウロがあり、隠れるのに調度良かった。ところまで行き着き、大きく息を吐いた。

「見られないでよかった……」

何せ今の自分の格好といったら、ヨレたジャージの下と、すりきれたソックス。上半身は上着というよりボロ。ついでに翼付き。こんなのが後生大事に半透明袋を抱えて全力疾走してる姿とか見られたら、なんというか……死ななくても大事なものが磨り減ってしまいそうだった。既にいろいろ遅い気もするが、せめて羞恥心だけは人並みにとっておきたかったのだ。
息を整え、さらった獲物を確認する。
そう、今日はどうやら燃えるゴミの日らしかった。
選んだ獲物はこの服がたっぷり詰まったゴミ袋。子供向けの服もそれなりに詰まっていそうだった。
ほくほくと中身を確認し、使えそうなものを選り分けていく。

――整理中、整理中、整理中。
うん……なかなかの物がゲットできた。
大人の大きさのワイシャツ、サイズが合わなくなって捨てることになったのだろう、あまり汚れもない。
普通のTシャツ3枚、子供にサイズが合わなくなったようだ。デザインが……某ネズミーのキャラ物なのがちょっとアレだが。今の身体にぴったりなのが悔しい。
それに未使用のタオルが出てきたのには驚いた。貰い物で、余ってしまったのだろうが、なんとも勿体無いものだった。ともあれ、有り難く使わせてもらうが。
嬉しかったのは運動靴か。少し大きいが、十分履ける。裏にガムが付いてたが。今の親はこのくらいでも捨ててしまうのだな。ともあれ、履物は嬉しい。今まで靴下で外歩きだから、大分足に傷も出来てしまっていた。早速ガムを枝で削り落として履かせてもらう。
……妙なものも大分出てきたというか、使用済みと強く自己主張しているかのような、何かカペカペになっているセーラー服とか大人用スクール水着とか。蝋のついた麻縄とか。うんまあ、地面に埋めて証拠隠滅しておこう。というかこういうものはせめて紙袋で隠してからゴミに出したほうがいいと思うが……うん、ゴミ泥棒が言えることじゃないな。
少々げんなりとしつつも整理を終え、ひとまずこれで身支度を整えることができそうだ。一発目のゴミ袋でこれだけの当たりというのも相当に運が良かった。衣類が調達できるまで数回は同じことを繰り返すのを覚悟していたので幸先の良さに鼻歌が出てしまいそうになる。
最早、上着というよりボロか布切れと形容しなくてはならないジャージを脱ぎ捨て、ワイシャツを羽織る。この大人サイズのワイシャツなら、翼をきっちり折り畳めば……
「……ぉうあってててててっ」

羽根が攣ってしまった。悶えながら突発的に思いついたあの台詞が何とはなしに口から出てしまった。

「ぐぅっ……白翼を持たぬものには判るまい……」

……痛みは紛らわせたものの、周囲に誰もいないというのに万が一を考えキョロキョロ見回し、一人赤面してしまった。いやホント、何言ってんのよ俺。

◇

「うし、これでよし！」

身支度を整え……ズボンに類するものは無かったので元のヨレたジャージのままだが、せめてもと、くっついた埃だのゴミクズだのを綺麗に払って、準備は完了。ぶかぶかのワイシャツで翼を隠すことも何とかできているようだ。力入れてないともこもこしてくるので、それなりに大変だが、背に腹は代えられない。

思わず走り出しそうになってしまう足を押さえながら、早足で街につながる道路に踏み出した。

向かう場所は高台から確認した総合デパート。征く戦場は地下一階食品売り場。

――さあ、試食品の貯蔵は充分か？

「……はっ！」

何か、イタい思考が混入した気がする。

身体に影響されて精神年齢が下がっているんだ。そうなんだ。絶対そうだ。理論武装は完璧だ。嘘だごめん。

頭をぶんぶん振って、とりとめのなくなった思考を追い出す。
なんだかんだで、自己主張を繰り返す胃袋には逆らえず、途中から駆け足になってしまった。
いつの間にやら目的地に到着していた。

「……はらへった……はらへった……はらへった……」

ヨダレが口から溢れそうになってしまう。
なにやら凄い顔をしていたのかもしれない。
目の合ったサービスカウンターの人に、全力で視線を逸らされた。
ああ、まあいい。そんなものは些事だ。
なにしろこちとら、ココのところまともに食べてない。
地下へ続くエスカレーターを下り、試食品と思わしき肉を焼く香りが漂う。胃袋が際限なく自己主張を繰り返し、口の中にヨダレが充満する。
俺はごくりと溜まったヨダレを飲み込み、息を整え、『食欲』という名の人間三大欲の一つを全力で解き放った。

◇

台風一過。
まさにその四字熟語がふさわしいかもしれない。
多くは語らない。ただ、一言だけ。
デパ地下の従業員さん、試食荒らしの事、本当にごめんなさい。
いずれ、金持ちになったら、この店でたっぷり散財しよう。
やっと満たされた腹を抱え、久しぶりに余裕のある気持ちで散策をする。
メインストリートというほどではないのだろうが、それなりに広い道に街路樹が植わり、ぽつぽつと散発的に小さな店が並ぶ。商店街があるとしたらその端のあたりなのだろう。腹ごなしにのんびり

散歩をするにはぴったりの場所だった。
ただ、先ほどは食に夢中だったのもあって気にしなかったのだが、道行く人がちらちらとこちらを見てくる。と言っても、犬に散歩させているお爺さんとお婆さんくらいしか見かけなかったが。
やはり目立つのだろう……白人にしても真っ白な肌に銀髪でオッドアイ。小汚い格好。俺もそんなの見かけたら驚く。
ふと思い立って、人通りの多そうな方に向かう。少し前にちらっとメインストリートっぽい通りを見かけたのだ。そこは昼前というのにそれなりに人が歩いているようだった。
自分自身がどのくらい目立つかを把握しておこうかと思っての事だった。

「う……」

呻いてしまった。その通りを歩き始めて数分にも満たない時のことだ。
どうにも視線が刺さる刺さる。以前は全くこんな経験がなかったので、一目散に逃げたい衝動が心でもたげる。
とはいえ、変な格好の外人の子が歩いてる、程度の認識で済ませてくれているらしく、一番緊張したお巡りさんの傍を通る時も、訝しげな顔をしたもののスルーしてくれた。
日本人の事なかれ主義に感謝。
ともあれ、やっと、というかようやくというか。現在地が判明した。
いや道路の案内標識に『海鳴駅２ｋｍ』と書いてあるわけで。
よくよく見れば、道路沿いの標識にも市名が書いてあるわけで。
……俺は本当に今の今まで余裕を無くしていたらしい。というか自分の間抜け具合に膝が折れそうになった。頭を抱えて振り乱したくなった。この調子だと、何か他にもあほな事やってんじゃないのかと心配になった。

と、ともあれ、次のことを考えることにする。思い悩んでも仕方ない事はあるのだ。
衣食はなんとかなったので、次は住だ。
と言ってもこれはあまり心配していない。季節柄はどうも春と夏の合間らしく、野宿も難しくないシーズンだったからというのもある。長い目で見ればどうかと思うが当座は何とでもなるだろう。
ひたすら足で探そうかとも思ったが、ふっと思いついたこともあり、前に高台から一望した時に見えた銭湯に向かう。目当ては昨日拾ったなけなしの小銭で一っ風呂……といきたい所だが違う。ああ、コーヒー牛乳が恋しい。腰に手を当て、親父飲みしたい。いや童心に帰ってイチゴ牛乳もなかなか……。
と、思考が逸れた。狙いはその高ーい煙突にある。昔ながらの銭湯の近所の子供なら一度や二度はよじ登って怒られたであろうあれだ。街の中から町並みを一望すれば、あるいは雨風のしのげそうな廃屋でも見つかるかもしれない。

◇

結果から言えば、想像の斜め上のものが見つかった。
しかし、煙突に登って見回していたら、銭湯のおっさんに見つかってしまい、こっぴどく怒られたのは置いておく。
気を取り直し、見つけたお目当ての方に向かった。
方向としては元来た方向、俺が最初から居た山林の方向だ。
山と街の中間のような場所、通りから少し外れた側道に、周囲の田園風景とはまるで場違いなようなそうでないような、こんもりとした雑木林がでんと構えていた。
周囲は錆び錆びのフェンスに囲われ、とりあえずの境界を作っている。
入り口と思わしき鉄の門には、年代ものの鎖が張られ、封鎖されている。ところどころが割れ、雑草が生い茂るアスファルトの道が

その雑木林の中に続いていた。

「放置されて、ウン十年は経ってそうだな……こりゃ」

おじゃましまーすと小声で呟いて、１メートル少々の高さの門を飛び越える。

もはや山道と言ってもおかしくないようなボロボロの道を歩く事５分。ちょこちょこ曲がりながら、３００メートルも道なりに歩いた頃だったろうか。建物が見えてくる。

「……到着ーと。しかしこりゃまた……雰囲気のあることで」

思わず一人ごちてしまう。これは無理もないと思う。じゃりじゃり音を立てながら見て回る、靴を拾えて本当によかった。

塗装も落ち、虫食いのように穴が開いているトタン屋根。劣化してめくれ上がっている外装。ところどころで剥げ落ちて鉄筋しか残っていない場所すらある。

窓ガラスがかろうじて残っているのが奇跡のようなものか。床には落剥した破片だのなんだのとわからないものがビスケットのカスのように散らばっている。

最近流行りになっているらしい、廃墟巡りのコミュニティサイトに投稿したくなるような、立派な廃工場だった。

工場そのものの敷地も相当広く、かつては相当大口の仕事もしていたのだろう事は想像できる。今は工場の中身はがらんどうなので、どういった業種かは定かではないが。

ともあれ。

「あてが外れた……」

ちょっと落胆する。遠目で見た限りではそれなりにボロくも屋根、

壁が見えたので、雨風はしのげるとは思っていたのだが。間近に来て見ると劣化が酷い。
これは、雨でも降ってきたら、神社の軒下でも借りるか？　いや、考えてみたらこの子供ボディなら泣き落としで泊めてもらえるんじゃね？　泣き落としとか正直ないな、却下。
などと、益体も無い事をつらつらと考えながらも、工場の探索を続ける。
と言ってもそう複雑な作りになっているわけでもなく、何のひねりもない箱型の建屋なのでそう見るところもないのだが。
外に出て、ぐるっと周ってみると、どうも最初に見えた一番大きい建屋だけではなく並行して二の字を描くように工場建屋が並んでいるようだった。
だが、さらにその奥にある小さな建物に目を惹かれる。
もしかしたら、工場の事務所あるいは休憩所として使われていたのかもしれない、工場の建屋より随分手のかかってそうな小屋がそっくり残されていた。
あてが外れたなんて言ってごめん。これは大当たりだったかもしれない。
入り口の戸はさすがに体を成さずに外に倒れこんでいるものの、おもむろに覗き込んでみれば、６畳ほどの土間……というかコンクリートが打ちっぱなしになっているだけだが、その中央に昔のダルマストーブが鎮座し、壁際には食器棚らしきものが置かれ、その近くに木製の椅子が無造作に積み重ねてある。
土間の奥には板張りの床になっている部分が４畳ほど。仮眠用のスペースのようだ。
うん。間違いなくこの工場の休憩所だったようだ。小さい作りのためか、屋根のトタンも幸い目立つ穴は開いていない。壁にいたっては、憩いの施設だけはと奮発したのか、鉄筋コンクリート作りの上に板を張っている。
ともあれ、これで住の問題もなんとか目処が立ちそうだった。不

法侵入には申し訳ないが目をつぶってもらうとしよう。元々が放置されてる物件でもあることだし。
そして、ねぐらが決まれば、やるべき事はいくつも思い浮かぶ。
「まずは掃除……だなぁー」
コンクリートの床に積もった凄まじい埃をうかつに散らしてしまい、むずむずする鼻を押さえて呟いた。
工場に掃除に使えそうなもんでも落ちてるといいんだが……
いざとなれば、箒はそこらの枝でも束ねればいいし、雑巾は朝拾ったゴミの中から使えそうにもない服を使えばいい。
昨日とは一転して上機嫌な自分に苦笑が出そうになる。いや、でた。
「くふふ」
思ったより気持ち悪い含み笑いだった。
どうやら俺はトム・ソーヤーかロビンソン・クルーソーの真似でもしていれば、こんな訳の判らない状況でも楽しめるらしい。
全くもって現金な事この上なかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7834x/

道行き見えないトリッパー

2011年10月21日07時05分発行